

大きく広がる協働ネットワークの輪 子どもたちの未来のために、ふるさと久留米のために

平成25年11月17日、中心部商店街や東町公園周辺で、子どもたちが仕事体験ができるイベント「Dr. (ドクター) プンブン」が開催されました。実行委員会のスタッフ30人、ボランティアスタッフ170人、来場者は5000人以上となりました。

イベントを開催するにあたって、いろいろな人と人がつながり、新しいネットワークができていたので、実行委員長の音成龍司医師へ話を伺いました。

音成 Q たくさんの方が関わっています。Q どのような方法でネットワークをつくりましたか？

「日高滋紀医師の協力のもと、現役医師が講師を務める「子ども医学部」の開催を呼びかけたところ、子どもたちのためならと、たくさんの方が賛同してくれました。市民や各団体などへ取り組みの輪を広げるため開催の約1年半前、くるめ水の祭典に長年携わっている今村好典さんに相談しました。今村さんに多くの知り合い（協力者）を紹介してもらい、毎月の実行委員会のたびに知り合いが知り合いを紹介し、人の輪はねずみ算式に広がりました。久留米医師会、久留米青年会議所、一番街商店街、学生、ボランティアをはじめ多くの人と繋がりができました。その他、篠山校区まちづくり振興会、篠山小学校、久留米市私立幼稚園協会、新聞社、TV局など多くの方々にも協力していただきました。



子ども医学部の様子



Dr.プンブン 東町公園エリアの様子

協働見聞録

平成25年度に取り組まれた 新たな「協働」の事例を、ネットワーク(=仲間)という視点から紹介します。

音成 Q 今回、子どもたちが仕事体験ができるイベントを始めたきっかけは何でしょうか？

久留米は医療・商業・芸術が盛んな素敵な街です。私はそんな久留米に住む1人の大人・医師として、子どもたちの未来のために、これらを融合させた新しいイベントができないだろうかと考えていました。そこで、子どもに本物の大人の仕事(文化と文明:プンブン)を伝え、体験・学習してもらうことを思い起しました。

音成 Q 初めてのイベントでしたが、難しい問題がありましたか？

初めのこと、どのくらいの経費がかかるのかわかりませんでした。日ごとにと人と人との繋がりが、結びつきが強まり、当日のボランティアも無償で参加していたり、皆の力で何とか乗り越えられました。

音成 Q 今回のイベントは、人の輪、ネットワークの輪が大変うまく広がったケースだと思います。改めて、ネットワークをつくるコツについて聞かせてください。

「未来を担う子どもたちの笑顔を見るため、ふるさと久留米のため」という熱い思いを説明して回り、多くの人と思いを共有できたことが一番だったと思います。思いは、いつしか知らない人へも広がっていくのです。

音成 Q 初めてのイベントでしたが「まちおこし」に関心があったので協力しました。

「子ども医学部」教室を始め、子どもたちは食堂、お花屋さん、ペット美容、雑貨店など23のお店で仕事を体験しました。子どもたちは仕事の大切さ、大変さを感じたのではないのでしょうか。

音成 Q 今回のネットワークは、思いを共有した「人と人とのつながり」だったようですね。参加者を呼ぶことにつながりました。

「特定非営利活動法人くるめ水の祭典ガマダス今村好典さん」
今までにない発想で久留米に住む子どもたちの未来のために音成氏の熱い思いに惹かれました。自分自身「くるめ水の祭典」で20年実務を経験しているのでお役に立てばと思います。副実行委員長として応援しました。

地域で実践する協働の取り組み 大橋小学校・児童と住民参加による、初めての合同学習会

平成25年11月12日、久留米市社会福祉協議会の社会福祉教育協力校である大橋小学校で開催された「子どもたちと学ぶ認知症サポーター学習会」に4年生～6年生の46人と教員10人、地域住民31人が参加しました。

地域と学校との協働で学習会に取り組んだ大橋小学校の筒井校長、袋野教頭、永松教務主任の3人に、開催の経緯についてインタビューしました。

筒井 Q 今回、大橋小学校が地域の方と一緒に認知症サポーター学習会を開催したきっかけは何ですか？

久留米市社会福祉協議会から認知症についての学習会の話がありました。高齢化が社会問題になっていくので、子どもたちだけではなく、地域住民の皆様と一緒に認知症を学ぶことが重要ではないかと考えました。そこで、大橋校区まちづくり委員会秋永会長やPTA益永会長、校区社会福祉協議会石原会長、地域学校協議会西村会長、校区青少年育成協議会石井会長、校区の民生委員に話をしたところ、「校区の住民も認知症について学ぶ良い機会だ」ということで合同開催となりました。

袋野 Q 学習会の講師は久留米市長寿支援助の協力でキャラバン・メイトの皆さんにお願いました。

参加者が80人以上集まりましたが、地域の皆さんへのお知らせはどんな風にされたのですか？

認知症サポーター学習会の案内を作成し、子どもたちが自宅へ持ち帰りました。また、市の広報紙と一緒に、大橋校区の各家庭へ配布しました。そして、校区内の各団体のメンバーにも学習会への参加をお願いしました。

永松 Q お知らせだけで、たくさんの方が集まったのでしょうか？

本校では、JA青年部大橋支部

袋野 Q 学校と各団体が合同で「認知症サポーター学習会」を開催したことは、さまざまな団体が同じ目的を持って協力した協働の取り組みと言えます。

*大橋校区まちづくり委員会 秋永会長
大橋校区は高齢化率が33%で、5人に1人が75歳以上の高齢者です。私自身が認知症への思いが強く、認知症に対する正しい知識と接し方が必要だと思っていました。今後も、小学校と一緒に地域住民も参加して、認知症について継続して学習していくことが重要だと思います。

筒井 Q 今後は、どのようにされますか？

子どもたちが書いた認知症サポーター学習会の感想文を、大橋校区の各家庭に配りました。来年度もこの学習会を、子どもたちと地域との合同で開催できたらと思っています。これからもさまざまな活動が、地域の皆様と一緒にできるようにしていきたいと思っています。

また昨年は学校と地域との共催で初めて大橋ふれあい運動会を開催し、800人が参加しました。この時は教員・PTA・体育委員会・自治委員・女性代表・消防団・交通安全協会大橋支部などが2年がかりで準備をし、子どもたちがプログラムやポスターを作りました。この経験が学校・家庭・地域の連携に役立っていると思います。



平成25年暮れのもちつき大会



子どもたちと学ぶ 認知症サポーター学習会

*キャラバン・メイト 中村陽子さん
子どもたちと地域住民の皆様と一緒に、熱心に学習していただきました。また、子どもたちからの感想を聞いて、合同学習会に参加して良かったと思います。今回のような学校と地域と合同での「認知症サポーター学習会」が他の地域でも広がっていくといいと思います。